

● 事例紹介 ●

コミュニケーションリテラシー

～ 高大連携から生まれた湘北短期大学入学予定者対象の

接続教育プログラム～

小 棹 理 子

(湘北短期大学リベラルアーツセンター・情報メディア学科 教授)

はじめに

「コミュニケーションリテラシー」は、平成一八年度「特色ある大学教育支援プログラム」として採択された「高大連携による地域教育ネットワークの形成」の成果の一環である。湘北短期大学がコアとなって高校―大学間、ならびに高校間を結ぶ地域教育ネットワークを形成する活動をとおして、接続教育のあり方を検討し、高校・大学双方の教育の改善に役立てることがこの取組全体の目的である。本学は平成一四年度に神奈川県の一八高校と高大連携協定を締結したが、平成一九年三月現在、連携校は二八

校に上る。このような背景のもと、平成一八年度の準備段階を経て、平成一九年度に高校教員と本学教職員からなる研究会「コミュニケーション教育研究会」を設立した。平成一九年四月より「コミュニケーション教育研究会」のミーティングを月一回の頻度で開催した。アンケートによる調査や研究を行い、それに基づいて討議を重ね、入学前接続講座(全一二講)「コミュニケーションリテラシー」を開発した。この高大連携による高校生向けの講座を平成二〇年二月～三月に開講した。以下に「コミュニケーションリテラシー」の詳細を紹介する。

一 リベラルアーツ科目と高大連携

湘北短期大学では設立時から社会に役立つ人材を育てる実務教育を行ってきた。専門性を持った職業人を育てるには、専門教育のみならず社会人が備えるべき基礎能力の教育も必要である。そのような基礎能力の育成は本学の中ではリベラルアーツ（LA）科目群により実現されてきた。一方、高等教育機関への全入時代を迎える中で、学力や勉強意欲の低下の問題が顕在化してきた。短期大学で達成すべき学業成果をあげるためには、二年間という限られた時間を最大限有効活用することが求められる。

本学の高大連携はそのような背景から生まれた。高校―短大間で双方向的な情報のやり取りを行うことによって高校教育の実態を深く理解し、短大教育を最適化する。このことによって、高校―短大の五年間の教育をシームレスに接続し、より優れた中等―高等教育スキームの実現をめざす。さらには高校間の情報交換の場としても機能する地域教育ネットワークの要たるべきことも理念としている。

上記の目的と理念のもと、平成一三年度から神奈川県東地区の県立高校と、本学の理想とする高大連携の実現について協議し、平成一四年に県立高校一八校と高大連携協定

書に調印した。以来、正規授業の開放、出張授業、土曜講座など、さまざまなプログラムを開発して提供してきたが、本プログラム内容に賛同され、連携を結ぶ高校の数は着実に増加しており、地域も拡大して平成二〇年四月現在では都立、川崎市立高校各二校を含め、二九校（四月調印予定一校を含む）に達している。図1に平成一九年一〇月時点の連携校の分布を示す。

二 高校へのアンケート調査

湘北短期大学近隣（神奈川県、静岡、東京など）の高校三六六校にアンケートへの回答を依頼した（二〇〇七年六月三〇日～七月二〇日）。このアンケートの目的は、高等学校で既に学習済みと考えられている能力を把握する一方で、不十分と思われる能力を明確にすることである。九二校の教務担当者、進路担当者、キャリア支援グループ、教科担当者などから回答があった。誌面の都合で、アンケートの設問内容は省略する。

このアンケートでは、「キャリア基礎能力」と「社会人基礎能力」について質問した。「キャリア基礎能力」は、本学が企業に向け平成一五年に行ったアンケートで、職業



図1 湘北短期大学と高大連携協定校（全27校）の分布（平成19年10月現在）

人が持つべき基礎能力として提示したものである。したがって、それら能力の必要性を設問Aで聞いている。一方、「社会人基礎能力」は経済産業省「社会人基礎力研究会」の定義に基づいたものである。なお、回答は、「おおいに必要」／「十分である」（5）、「やや必要」／「ほぼ十分である」（4）、「どちらとも言えない」（3）、「やや不要」／「やや不十分」（2）、「まったく不要」／「不十分」（1）の五段階とした。

図2は回答結果である。ただしここでは、「キャリア基礎能力」に関する結果のみを示す。「コミュニケーション能力」の必要性が際だって高いことがわかる。八〇%超が「大いに必要」、残りが「やや必要」と答えている。「大いに必要」と「やや必要」をあわせて次点となるのが「PC基礎操作能力」である。「まったく不要」と「不要」の回答がなく、「大いに必要」と考えている割合が高いのは「一般常識」「就労意識」「課題発見能力」「ビジネス文書力」である。一方で、高校卒業時に比較的良く獲得されたと考えられる能力は「PC基礎操作能力」である。教科「情報」が中等教育段階に完全導入されたためであろう。専門知識は当然であるが、それ以外に高校卒業時に「やや不十分」「不十分」で、かつ「ほぼ十分」「十分」の割合の低い能力

三 三― コミュニケーション教育研究会
 接続教育プログラムを開発するために、連携高校に呼びかけを行った。平成一九年四月一七日に本学にて第一回目の研究会を開催し、「コミュニケーション教育研究会」の名称と基本方針を確立した。第二回目以降は、接続プログラムの内容を検討する上でさまざまな事例研究や高校の授業見学等を行った。連携高校には研究会議事録とともに次回の開催案内を送付した。毎回高校教員四〜六名、湘北短大教職員五〜六名が参加した。表1に研究会の開催実績を示す。「コミュニケーションリテラシー」はこの研究会のミーティングで開発された。

三 三― コミュニケーションリテラシー
 以上の結果から、接続教育では、必要であるにもかかわらず高校では十分に習得されなかった能力を向上させるプログラムを、「コミュニケーション教育研究会」で開発することになった。
 としては、「課題発見能力」「コミュニケーション能力」「一般常識」があげられる。「ビジネス文書力」は「やや不十分」「不十分」の割合が高いが、一部「十分」と考えている高校もある。

表1 コミュニケーション教育研究会開催状況

回	日時(2007)	場 所	内 容
1	4月17日	湘北短期大学	新しい高大連携接続教育のコアとしてコミュニケーション能力の育成が必要であることを確認。他の接続教育プログラム例の紹介。
2	5月16日	神奈川県立茅ヶ崎高等学校	高校での「情報」授業と図書室の見学。接続教育プログラム用テキスト内容の検討。「情報」授業参観とその他授業例の紹介。
3	6月13日	湘北短期大学	他参考例の紹介。接続教育プログラム用テキスト内容具体案の策定。
4	7月30日	湘北短期大学	参考資料・書籍の配布。テキスト各章の具体例提示。
5	9月20日	湘北短期大学	具体的な接続教育プログラムの検討。
6	11月8日	湘北短期大学	日時を含めた詳細な接続教育プログラム「コミュニケーションリテラシー」講座の検討。
7	12月13日	湘北短期大学	スケジュールと入学者、高校への配布文書の確認。
8	2008年1月22日	湘北短期大学	申し込み状況の確認と当日打ち合わせ。
9	2月15、16、28(または29)日 3月12日(最終日)	湘北短期大学	高校教員・湘北教職員による4日間の「コミュニケーションリテラシー」講座(全12講)を開講。(詳細は後述)「コミュニケーションリテラシー」講座第12講(グループ発表)を高大連携各校に公開。(高大連携協議会開催日)
10	3月26日	湘北短期大学	「コミュニケーションリテラシー」のふりかえり。アンケート結果の報告と今後の検討。

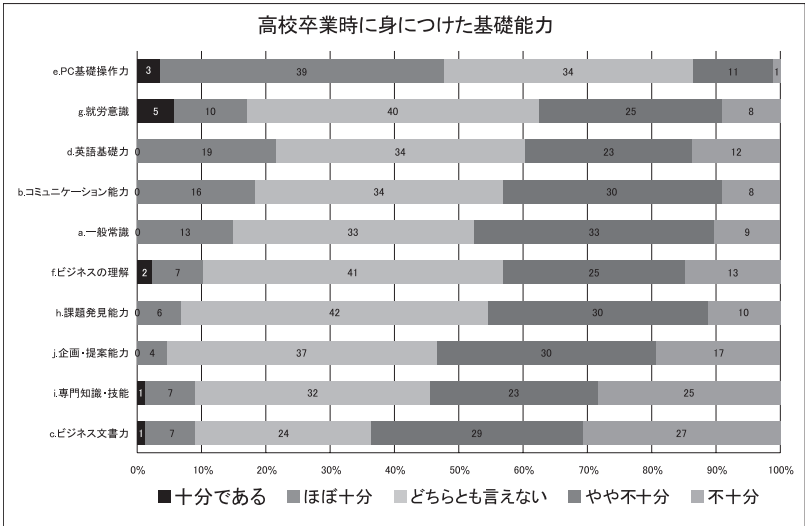
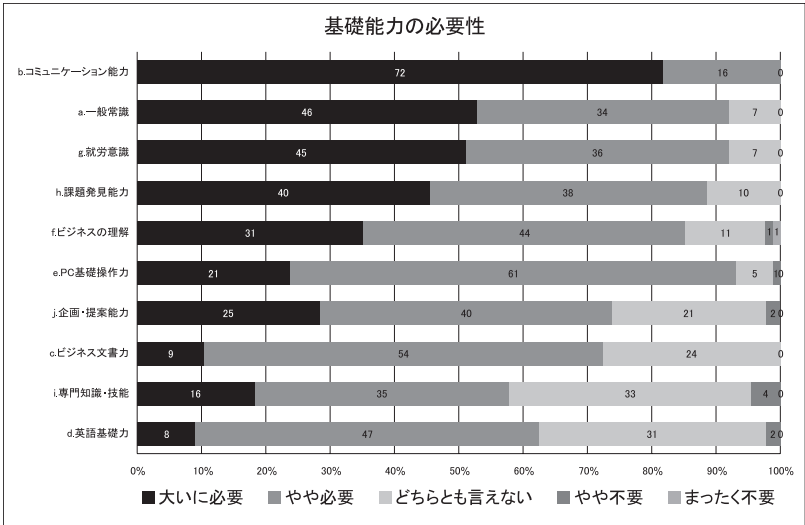


図2 高校生に求められる各キャリア基礎能力の必要性の度合い(上)と卒業時における達成度(下)

三二二 コミュニケーションリテラシー

社会人として必要な基礎能力の育成という観点から、真のコミュニケーション能力に必要なものとしては、「話す・書く力」、「コミュニケーションツールとしての電子メールやパソコンソフトウェアの利用法」、「確かな情報源としての図書館の正しい利用法」、「グループとして取り組む」問題解決やクリティカルシンキング（批判的思考）」などを導入した。五〜六人のグループワークで問題解決・企画提案にあたる形式をとった。

「コミュニケーションリテラシー」全一二講は、一講九〇分で、表1に示した四日間にわたり実施した。入学が決定している連携校を対象に参加者を募ったところ、一二校から生徒三〇名が参加した。テキストはワークブック形式とし、Microsoft Excel[®]の第六・八講はWebテキストを用いた。内容は次の通りである。

1. ガイダンス―教員紹介、大学内設備・施設の利用法
2. コミュニケーションの手段とE-mail〔担当 小棹〕
Mailソフトの使い方、E-Mailの仕組み、ビジネスメールの書き方
3. コミュニケーションの基本 〔担当 伊藤〕

4. コミュニケーションの基本 〔担当 伊藤〕
書く技術
5. インフォマティックス〔担当 高橋、藤澤、小棹〕
レポート作成の手順、図書館の利用―新聞記事等の検索

6. Microsoft Excel[®]の復習とデータベースとしての利用 〔担当 小棹〕

7. 問題の発見 〔担当 小棹〕
問題の設定

8. 問題の分析―Microsoft Excel[®]の応用 〔担当 小棹〕
情報の整理、図表化

9. 情報の分析と問題解決（1） グループワーク 〔担当 小棹、住谷、原〕
発想法

10. 情報の分析と問題解決（2） グループワーク

〔担当 小棹、住谷、原〕

収束技法または構造化、案の評価

11. Microsoft Office[®]を用いたまとめと発表 〔担当 小棹〕

12. グループ発表 〔担当 小棹、住谷、原〕
発表の評価、グループメンバーの寄与度評価

講座修了後、生徒に対するアンケートを行った。その結果、約六割が「高校と大学での勉強の仕方の違いがわかった（社会人への小さな一歩）」、「（ツールとしての）PCの操作能力を向上したい」と答え、さらに五割が「入学前に友人や教員を知った」、「問題発見・解決の仕方がわかった」、「積極的に短大生活に取り組みたいと思った」と回答している。また、本講座を他者（後輩や友人）に勧めるかどうかに関しては、約七割が積極的に勧めたい、としている。また、最終講を参観した一五の高校の教員からは、

「グループで問題解決にあたる内容は新鮮」「短時間であればどのプレゼンができるかは驚き」「高校にはない資源（図書館・PCなど）を利用した講座は貴重」などの声が聞かれた。

四 おわりに

「コミュニケーションリテラシー」は、従来のリメディアル教育や大学プレ教育とは異なる。高校卒業時に必要とされる能力と、短大卒業時に職業を持つ社会人として必要な能力を育てるための、いわば高校側のニーズと大学側のニーズの双方を満足させる、新しいWin-Win型の高次連携の形をめざしたとも言える。さらに、プロセスとして月に一度の割合で一年間コミュニケーション教育研究会での話し合いを重ねたことにより、高校―大学間のみならず、高校間での情報交換も活発に行われ、参加校の満足度の高いプログラムとなった。平成二〇年度は「コミュニケーションリテラシー」講座の効果を検証しつつ、内容・規模を拡大する予定である。

〔謝辞〕

本接続教育プログラムは、コミュニケーション教育研究会参加の高校教員ならびに本学教職員の一年余にわたる新しい教育への取組の結果として実現されたものです。誌面をお借りしてそのご尽力に感謝します。またリベラルアーツセンター教職員のご支援に感謝申し上げます。